Professi　onal対談

野球なんてそんなものは　ねぇ、
一瞬の夢みたいなもんで　すよ、長い人生においては…。

（前編）

戦後という状況下で幼少時代を乗り越え、大きな夢と大きなキャッシュを一度に掴む。人生においてあらゆるときもプロフェッショナルでありつづけるタレント板東英二氏の男の生き様を問う。

板東 英二　タレント
Eiji Bando

平川 幸治　株式会社平川製作所 代表取締役社長
Koji Hirakawa

平川：板東さんは満州のご出身だとお聞きしました。戦後という状況下で幼少時代を過ごされ、やはりいろいろとご苦労されたと思うのですが。

板東：そうですねぇ、僕が6歳の時ですけど、敗戦と同時に生活がすべて変わったらしいですから。でも、その当時の事情は一般市民にはわからないんですよ。とにかく当事者でない人たちにとってはたいへん迷惑な話でね、お互いの国において。その後、満州から1年半がかりで引き揚げてきまして、おふくろがよく連れて帰ってくれたなと思うくらいで。博多に上陸した時は、それこそ栄養失調で四つん這いだったといいますから。そうとうなことだったと思いますよ。

平川：帰って来られてからがまたたいへんだったと思うんですよ。

板東：こう言っちゃなんですが、僕は貧乏は犯罪だと思ってるんです。というのも当時近くに捕虜収容所がありまして、そこらの鉄条門からなにから全部壊して鉄くず屋で売るわけですよ。みんな生きていくために、そら片っ端から。そこら辺になってるものは食べるし、まわりの農家の方たちもたいへんだったと思いますよ。「衣食足りて礼節を知る」というくらいで、衣食の足りない人間の本能なんて善悪を超えますからね。白いご飯というのもそうそう食べられなかったし。牛肉なんてプロ(野球)の契約を結びに行った時に初めて食べたぐらいですから。

平川：そのような経験をされた後1959年、破格の契約金で中日ドラゴンズに入団されました。大きな夢と、そして大きなキャッシュを手に入れた時の心境というのはどのようなものでしたか？

板東：契約金は手取りの2000万円でしたからねぇ、当時の大卒者の初任給が1万円程度。そらもう莫大なお金ですよ。でも高校生の時に僕は1か月500円しか小遣いをもらってなかったんで、そんなもんにその2000万の値打ちがどんなものかなんて絶対わからないですよ。

平川：同期でジャイアンツに入団されたあの王貞治選手ですら契約金は1800万円でしたから、すごいことですよね。

板東：でもね、当時はやはり王くんが日本中を一番騒がせていたんですよ。でも彼は夏の甲子園に出られなくて。僕は出たんですけど、偶然まぁまぁ活躍したり、ちょっと記録を塗り替えたりということから僕もワァ～と騒がれはじめたんです。ところが国体に出たいという学校側の都合で僕がなかなか契約しないもんですから、その間スカウト同士でガンガン金額を吊り上げていくんですよ、すごい選手だろうと踏んでね。当時は自由競争でしたから。でもその時に、大学がとりにきたんですよ。僕自身、そんな価値のわからん2000万円よりも大学へ行きたかったですから、親に「大学へ行きたい！」と言うと、親父が暴れまくりましてね。

平川：僕も父親だったらきっと暴れてると思います(笑)

板東：まぁ100万長者の時代ですから、宝くじの当たりも30万円程度。だから高校生の僕にはよけいに理解のできない金額でしたよ。

平川：そしてその契約金をもとに、板東さんの有名なビジネスストーリーがはじまるわけですね。

板東：いや、契約金は僕がもらったわけじゃないですから。お金は親父が管理してました。給料も親から3万円もらって。ところがもうオールスターを過ぎた頃には3万円では足りなくなってきまして。先輩に教わった、きれいなお姉さんのいるクラブなんかにも行くようになりましたしね。そしてプロ3年目の時、親父に結婚資金の相談に行ったところ、すでに預けたお金はなかったんですよ。おそらく株だったと思うんですが、ちょうどバブル経済が崩壊した時みたいに持っていた株券が全部紙切れにかわってたんでしょうね……。

平川：なんとも申し上げようがないお話ですね。さぞ精神的にも大打撃を受けられ、その後の野球人生に影響はなかったですか？

板東：たしかにショックは大きかったですよ。親子の関係もおかしくなりますし。それでも僕は2年目でまぁまぁ活躍してたんで、年俸も400万くらいになってたかな。だからまぁ、なんとか行けるわ、もういいや、ということであきらめました。でも僕はもともと身体も小さかったですし、ピッチャーでそんな小さいのが成功するわけもないし、だからなにかしなきゃいけないとは常に思ってたんですよ。

平川：その若さで夢を手に入れられたのに、すごく冷静でシビアな考えを持たれてたんですね。

板東：それはやっぱり僕らは平川さんのところみたいになにかモノをつくったりする技術がないですから、戦う術がないんですよ。野球なんてそんなものはねぇ、一瞬の夢みたいなもんですよ、長い人生においては…か？

板東：プロ1年目から牛乳の販売なんかもやってたんですが、最初に儲かったなぁというのは、2年目に入ってからのことです。2年目のシーズンオフにゲーム機のタイトーの方と偶然知り合いましてね。その頃はまだタイトーもジュークボックスだとかピンボールなんかを売ってました。そのジュークボックスが当時120万円くらいで高かったんですよ。それを1台売ると30万円のマージンがあると聞いたんです。当時、僕の月給が20万円ですよ、そりゃ売りますよ。それもシーズンオフで退屈なんだから。それでアッという間に10台売りました…。

平川：やはり夢は追い求めている間が幸せということなんでしょうか……。ではその後いくつかの副業をされて、なにか手応えみたいなものはありましたか？

板東：その後はナイトクラブなんかもやりまして、それはもう来る芸能人も超一流で、美空ひばりさんだとか森繁久弥さんだとか大スターがいっぱい来てくれてましたから。それを見たさにまたいろんなお客さんが来るんですよ、だから閉店の朝5時になると店の前にタクシーがズラーっと並んでましたね。

平川：もし板東さんの現役時代にインターネットがいまのように普及していたら、ベンチでパソコンを広げてサイドビジネスと言うこともあり得たのではないでしょうか？

板東：そりゃぁもうやってましたよ。絶対にやってました。完全にやってましたね(笑)

（後編は、エミダスマガジン夏号につづく）

Photo：ジョン　ハート　／　AP：奥宮　健二　／　監修：渡部　和聡